

病苦からの解放 ～『摩訶止観』にみる病患～

吉田実盛（叡山学院）

本発表は天台智顛の講述した『摩訶止観』病患境を精読することによって釈尊のいう四苦八苦の一つである病苦からの解放を探究しようとするものである。

① 『摩訶止観』観病患境では病の分類、相、因、治病法などを明かす

病に二義あり、一には因中の実病、二には果上の権病なり。……是の如き権病は今の所観にあらず。（大正蔵四六・一〇六・a～b）

② 病氣の相

病の相は、もし医術に善きは巧みに四大を知る。上医は声を聴き、中医は色を相し、下医は脈を診る。いますべからく精しく医法を判ずべからず、ただ略して知るのみ。それ脈の法は医道に関わる。具さなることをいうべからず。（大正蔵四六・一〇六・b）

③ 病氣の因

病が起こる因縁を明かすに六あり。一には四大不調の故に病あり。二には飲食不節の故に病あり。三には坐禪不調の故に病あり。四には鬼神が便を得ればなり。五には魔の所為なり。六には業起こるが故に病あり。（大正蔵四六・一〇六・c）

④ 病氣の因の第五

現在のウイルス性病病原菌による疾病は摩病に含まれるものと思われる。魔病とは鬼とまた異ならざるも、鬼はただ身を病ましめ、身を殺す、魔はすなわち観心を破し法身の慧命を破す。邪の念想を起して人の功德を奪うを鬼との異なりとなす。また行者が坐禪のなかにおいて利養を邪念するによって、魔が種種の衣服・飲食・七珍・雑物を現するにすなわち領受歡喜すれば、心に入って病を成す。この病治しがたし。下の治のなかにまさに説くべし。（大正蔵四六・一〇七・c）

⑤ 治病の法

治病を明かすに、宜対同じからず。もし、行役し食欲して患を致すは、これ方薬をもちいて調養すればすなわち差ゆ。もし坐禪調わずして患を致すは、これかえって坐禪をもつてよく息観を調うるにすなわち差ゆべきのみ。すなわち湯薬のよろしきところにあらず。もし鬼・魔の二病は、これ深き観行の力および大神咒をもつて差ゆることを得んのみ。もし業病は、まさに内に観行をもちい、外には懺悔をもちうべし、すなわち差ゆることを得べし。衆の治あつて、同じからず。よろしくよくその意を得べし。刀を操つてみずから刃を毀傷すべからざるなり。（大正蔵四六・一〇七・c～一〇八・a）

⑥ 治病の心得を十法で示す

治病法を信じて、使用し、勤めて行い、怠ることなく、正しい治病に努め、正しくない方法は改め、やってはならないことをしっかりと守り、治らないと思つたり人に思わせたりすることで治療を遮ることになつてはならない。

⑦ 十乗観法を修す

心と身体は密接に関連づいているのだから、心を調えることで病は癒える。また癒えずとも軽くすることができたり、心持ちが晴れやかになつたりする。

(1) 四諦の教への観法によって声聞の法界の境地を得ることができる。

(2) 十二因縁の観法によって縁覚の法界の境地を得ることができる。

(3) 六波羅蜜の実践において空觀を悟り、菩薩の法界の境地を得ることができる。

(4) 維摩居士の病は利他行の表れであり、空觀を通じて皆の心の健康を獲得する。

天台智顛は分類整理することで釈尊の八正道による病苦の克服を追説したのである。